

バンザイ 100歳 \ (^o^) /

—高齢化社会において行政が果たす役割とは—

直方市長 壬生隆明

敬老の日を迎えて、今年度100歳になられる市民の皆さまを訪問してお慶びを申し上げます。

今年度、100歳になられる市民の方は20人いらっしゃいます。この方々を含めて、100歳以上の方は54人いらっしゃいます。また、今年度88歳の米寿を迎えられる方は357人です。私が直接お祝いを申し上げた100歳の方々は、皆さんお元気で、ご自分の気持ちをご自身の言葉でしっかりと話されました。100歳を迎えられた方々からすれば、60歳、70歳はまだまだ若輩ものということになりそうです。

ところで、市内の65歳以上の高齢者は約32パーセントとなっております。3人に1人が高齢者ということになります。これは、全国的な水準を超えています。全国的には、2025年に全国の高齢者率が30パーセントを超えるとして問題にされていますが、直方市は、既に深刻な問題に直面していることになります。

こうした社会の中で、行政はどのような役割を果たすべきでしょうか。いろいろなことが考えられるでしょう。実際に様々な施策が行われてもいます。その中で、「終末」ということに焦点をあてて考えてみたいと思います。

人は誰もみな、生まれ、年老い、病になり、そして死んでいきます。「生老病死」といって、この命の過程を表わす言葉もあります。また、「終末医療」という言葉を目にされた方も多々と思います。死に直面した人に対する医療を表わす言葉です。このように「終

末」という言葉からは、医療が主役であり、行政が入り込む余地などないように思えます。

しかし、今、「終末」という表現が見直されています。「終末」といえば、ただ死に向かうだけの暗く消極的な姿しか見えてきませんが、それをより積極的に飲びに満ちたものに変換しようとする考えが現れるようになりまし。ここでは、「終末」と言わずに、「人生の最終段階」と呼ぶようになりました。そこで、この人生の最終段階に対して、行政はどのように関わっていくべきかが問われるようになりました。私は、この人生の最終段階に対して、行政が積極的に関わっていくべきだと考えています。それは、人生の最終段階をたった一人の力で生き抜いていくことは、とてもできないからです。

行政と市民の方々との関係について、「自助」・「共助」・「公助」ということが問題にされます。「自助」とは、自分の命は自分で守りましょうということ。 「共助」とは、隣近所の人たちと一緒に力を合わせて、お互いに命を守り合おうということです。「公助」とは、行政が責任をもって市民の皆さんの命を守りますということ。

さて、人生の最終段階において、人は自分の意思を伝えることができません。例えば、自分に対する最終的な医療の在り方について、自宅がいいのか病院でいいのか、延命治療をするのかしないのか、といった場所や医療の内容について、自らの考えを伝えることができないのです。ですから、元気なうちに、自分の人生の最終段階における医療の場所と内容について、どこで、どのような医療をしてほしいかを明確にしておけるような仕組みが必要です。こうした問題は、「自助」でも「共助」でもなく、「公助」として行政が積極的に関わって仕組みを作っていくことが必要です。

また、穏やかで、安らぎに満ちた人生の最終段階を迎えるためには、ホスピスや緩和病棟が必要です。しかし、この街にはホスピスも緩和病棟もありません。こうした状況を変えていく必要があります。ここでも行政が積極的に関わっていかねばなりません。

行政のすばらしさは、その意志さえあれば、自ら変革を実践できるということです。

しかし、なにもかも行政がするのではなく、市民の皆さんが、その知恵と力と愛情を持ち寄って、この街で人生の最終段階を迎えられる方々のためにできることもたくさんあるはず。そして、一つだけ確かなことは、人生の最終段階において、もはや「自助」はあり得ないということです。だから、私たちは、「共助」と「公助」によって、一人ひとりのかけがえのない人生の最終段階を支え、励まし、優しさと安らぎと喜びに満ちた街を作っていきたいと願っているのです。

市民の皆さんとともに、一人ひとりの人生の最終段階の願いをのせて車を走らせたいと思います。それは、この街に住み暮らす人々の「願いの車」であります。

